慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	境一三教授：略歴と主要業績
Sub Title	Kurzbiographie Kazumi Sakai
Author	
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.62 (2022.) ,p.167- 179
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	境一三教授退職記念号 = Sonderheft für Prof. Kazumi Sakai
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20220331-0167

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

この著作物は著作権法によって保護されています／ This content is protected by the Japanese Copyright Act

境 一三 教授　略歴と主要業績

1957 年 1 月 31 日川崎市生

学歴

1979 年 3 月　：東京外国語大学外国語学部ドイツ語学科卒業
1979 年～ 81 年：ミュンスター大学留学（ロータリー財団奨学生：哲学，美術史）
1983 年 3 月　：東京大学文学部美学藝術学科卒業
1985 年 3 月　：東京大学大学院人文科学研究科独語独文学専修修士課程修了
1987 年～ 89 年：ベルリン自由大学留学（ドイツ学術交流会（DAAD）奨学生：ドイツ文学，哲学）
1989 年 3 月　：東京大学大学院人文科学研究科独語独文学専修博士課程単位取得満期退学

職歴

1989 年　4 月～ 1990 年 3 月：成蹊大学法学部専任講師
1990 年　4 月～ 1997 年 3 月：同助教授
1997 年　4 月～ 2000 年 3 月：慶應義塾大学経済学部助教授
1997 年 10 月～ 2002 年 3 月：慶應義塾大学語学視聴覚教育研究室主事
2000 年　4 月～ 2022 年 3 月：慶應義塾大学経済学部教授
2002 年　4 月～ 2003 年 3 月：エッセン大学英語教育学研究室客員研究員
2003 年 10 月～ 2007 年 9 月：慶應義塾大学外国語教育研究センター副所長
2007 年 10 月～ 2013 年 9 月：慶應義塾大学外国語教育研究センター所長
2010 年　7 月～ 2020 年 3 月：慶應義塾大学 CEMS 運営委員（Language Coordinator）
2011 年 10 月～ 2017 年 9 月：慶應義塾大学経済学部運営委員
2015 年 10 月～ 2017 年 9 月：慶應義塾大学経済学部日吉主任

学会活動

1992 年 4 月～ 1996 年 3 月：日本シェリング協会理事
1997 年 6 月～ 2001 年 5 月：日本独文学会データベース委員会インターネット部会運営委員長

2001 年 5 月～ 2005 年 4 月：日本独文学会理事兼広報委員長
2003 年 5 月～現在　　：日本独文学会ドイツ語教員養成・研修講座実行委員（2011 年～ 2021 年：実行委員長）
2003 年 9 月～ 2014 年 8 月：Editorial Board Member of the European Association for Computer Assisted Language Learning
2004 年 5 月～ 2005 年 4 月：日本独文学会教授法ゼミナール実行委員長
2004 年 5 月～ 2006 年 4 月：日本独文学会ドイツ語教育部会長
2007 年 5 月～ 2011 年 4 月：日本独文学会理事
2012 年 5 月～ 2014 年 4 月：日本独文学会ドイツ語教育部会長
2012 年 12 月～現在　　：日本外国語教育推進機構理事（会誌編集担当）
2015 年 5 月～ 2017 年 4 月：日本独文学会関東支部長
2018 年 5 月～現在　　：日本独文学会ドイツ語教育部会選出理事
2019 年 5 月～現在　　：日本独文学会関東支部長

主要業績

【著書（共著，共編著）】

『多言語教育の意義とは？　外国語教育・学習研究に関する国際シンポジウム』（2021 年，iudicium Verlag・共編著）

『ことばを教える・ことばを学ぶ：複言語・複文化・ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）と言語教育』（2018 年，行路社・共著）

『多言語主義社会に向けて』（2017 年，くろしお出版・共著）

PUBLIKATIONEN DER INTERNATIONALEN VEREINIGUNG FÜR GERMANISTIK (IVG) Akten des XIII. Internationalen Germanistenkongresses Shanghai 2015（2016 年，Peter Lang GmbH・共著）

Medien und Interkulturalität im Fremdsprachenunterricht: Zwischen Autonomie, Kollaboration und Konstruktion（2013 年，Universitätsverlag Rhein-Ruhr・共著）

『日本と諸外国の言語教育における Can-Do 評価 ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）の適用』（2010 年，朝日出版・共著）

『ICT を活用した外国語教育』（2008 年，東京電機大学出版局・共著）

『パスポート独和・和独小辞典』（2004 年，白水社・共著）

『ドイツ語教授法―科学的基盤作りと実践に向けての課題―』（2003 年，三修社・共著）

『CD-ROM 書籍『最新外国語 CALL の研究と実践』』（2003 年，CIEC 外国語教育研究部会・共著）

Literarische Problematisierung der Moderne（1992 年，日本独文学会・共著）

【論文（共著を含む）】

「複言語主義に基づく第二外国語教育―資質・能力論を手がかりに考える―」（2021 年『外国語教育研究ジャーナル』2 号）

「慶應義塾大学外国語教育研究センター研究プロジェクト「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」における高大協働による取り組みとその実践例」（共著）（2021 年『慶應義塾外国語教育研究』17 号）

「東京を拠点とする韓国伝統芸能従事者の言語への態度―言語政策研究への発展可能性の検討―」（共著）（2021 年『言語政策』17 号）

「やさしい日本語と機械翻訳による言語意識の向上について」（2021 年『ドイツ文学』162 号）

「オンライン授業の可能性について―コロナ禍状況での実践を振り返って―」（2021 年『ドイツ語教育』25 号）

「イタリア・南チロルにおける CLIL―ドイツ語系学校への導入を巡って―」（共著）（2020 年『言語政策』16 号）

「内なるグローバル化と共通教育―言語・文化教育を柱として―」（2019 年『東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会研究集録』68 号）

「私たちはヨーロッパの言語教育から何を学ぶか？」（2017 年『南山大学地域研究センター共同研究 2016 年度中間報告』号）

「アクティブラーニングから見たドイツ語教育の現状と 21 世紀的課題」（2017 年『ドイツ語教育』21 号）

「人材育成とドイツ語教育―「コンピテンシー」をキーワードに考える―」（2015 年『ドイツ語教育』19 号）

「練習問題作成ソフト Lingofox」（2015 年『ドイツ語教育』19 号）

「生涯学習としてのドイツ語学習―CEFR を参考にした制度設計に向けて―」（2014 年『ドイツ語教育』18 号）

「『ヨーロッパ言語共通参照枠』（CEFR）は日本の外国語教育に何をもたらしたか？」（2014 年『複言語・多言語教育研究』1 号）

「ソフトウェア・レビュー：練習問題作成ソフト Lingofox」（2012 年『ドイツ語情報処理研究』22 号）

「ドイツ語教育研究（者）は果たして無用なのか？―ドイツ語教育部会におけるその役割について―」（2011 年『ドイツ語教育』16 号）

「ドイツ語母音発音の獲得に関する基礎調査」（共著）（2011 年『慶應義塾外国語教育研究』7 号）

「多言語化する社会のドイツ語教育―複言語・複文化能力養成の文脈で考える―」（2011 年『慶應義塾大学日吉紀要　ドイツ語学・文学』48 号）

「コミュニケーション摩擦と社会公正：国際ディベート大会での調査から」（共著）（2011 年『慶應義塾外国語教育研究』7 号）

「日本における CEFR 受容の実態と応用可能性について―言語教育政策立案に向けて―」（2009 年『英語展望』117 号）

Forming a Framework and Language Portfolio SIG（共著）（2008 年，*JALT2008 Conference Proceedings*）

「初年次外国語教育―大学間 CSCL の教育的効果―」（共著）（2007 年『日本教育工学会第 23 回全国大会講演論文集』）

「学術フロンティア推進事業「行動中心複言語学習プロジェクト」の課題と今後の活動について―CEFR をモデルとした言語教育政策の研究を中心に―」（2007 年『慶應義塾外国語教育研究』4 号）

Phonetische Schwierigkeiten durch muttersprachliche Interefenzen bei japanischen Anfängern der deutschen Sprache（2006 年，*Deutsch als Fremdsprache in Korea* 19 号）

「ドイツ語教育のプロを育てる！」（2006 年『ドイツ語教育』11 号）

「外国語教育における LMS の意義」（2006 年『第 46 回 LET 全国研究大会』）

「日本独文学会主催「ドイツ語教員養成・再研修講座」の成立と現状について」（2006 年，*Rencontres* 20 号）

「自律的学習者の養成―情報コミュニケーション技術を活用して―」（2005 年『言語　文化　社会』3 号）

Empfehlungen zur Lektüre zum Thema “Informations- und Kommunikationstechnologie (ICT) beim Fremdsprachenlernen”（2005 年，*Neue Beiträge zur Germanistik* 44 号）

「CALL と TBL（Task Based Learning）／教員養成における CALL の扱い」（20041000 年『外国語教育研究』7 号）

Die Deutschlehrerausbildung in der informations- und kommunikationstechnologischen Landschaft（2004 年，*Neue Beiträge zur Germanistik* 31 号）

「外国語教育における CALL の研究と実践」（2002 年『マルチメディア学習ネットワーク　2001 年報告書』）

「Web Exercise を使って―学生アンケートをもとに―」（2002 年『慶應義塾大学語学視聴覚教育研究室 らぼ通信』78 号）

「CALL 研究（1）―コンピューターを用いた外国語教育の史的位置づけ―」（2000 年『慶應義塾大学日吉紀要　ドイツ語学・文学』31 号）

「コンピュータ支援ドイツ語学習（CALL）の現状と展望」（共著）（2000 年『ドイツ文学』104 号）

「慶應義塾の新しい外国語教育構築のために―語学視聴覚教育研究室の取り組み―」（2000 年『慶應義塾大学日吉紀要　言語・文化・コミュニケーション』24 号）

「ドイツ語市販 CD-ROM 教材に関する日吉でのアンケート結果について」（共著）（1999 年『市販 CD-ROM 教材（西・仏・中・英・独）に関するアンケート調査結果―1998 年度　CALL プロジェクト―』）

「外国語教育に対するハイパーメディア環境の可能性について」（1997 年『ドイツ語情報処理研究』9 号）

「Loudspeaker を用いた初級学習者のための統合的練習」（1996 年『ドイツ語教育』1 号）

「インターネット時代の大学基礎教育」（1996 年『成蹊法学』43 号）

「初期フリードリヒ・シュレーゲルにおける時間意識と神話」（1994 年『シェリング年報』2 号）

「シェリングにおける自然の回復―神々を求めて―」（1987 年『詩・言語』30 号）

「初期フリードリヒ・シュレーゲル研究Ⅱ―「実在的なもの」そして「客観的なもの」―」（1986 年『詩・言語』27 号）

「初期フリードリヒ・シュレーゲル研究Ⅰ―「ことば」と「イロニー」をめぐって―」（1984 年『詩・言語』22 号）

【書評】

「程遠巍著『中華世界における CEFR の受容と文脈化』」（2018 年『言語政策』14 号）

「岩崎克己著『日本のドイツ語教育と CALL』」（2011 年『ドイツ語情報処理研究』21 号）

Friedrich Schlegel: Kritische Schriften und Fragmente, Studienausgabe in 6 Bänden（1990 年『ドイツ文学』84 号）

【雑誌掲載記事】

「発音・聞き取りレッスン 6・OE は丸い唇で」

『基礎ドイツ語』　三修社　1999 年 10 月号

「発音・聞き取りレッスン 5・L と R の聴き分け」

『基礎ドイツ語』 三修社 1999 年 9 月号
「未来形」 『基礎ドイツ語』 三修社 1999 年 8 月号
「発音・聞き取りレッスン 4・R の発音のいろいろ」
『基礎ドイツ語』 三修社 1999 年 8 月号
「発音・聞き取りレッスン 3・僕たち（wir）はビール（Bier）じゃない」
『基礎ドイツ語』 三修社 1999 年 7 月号
「男性弱変化名詞」 『基礎ドイツ語』 三修社 1999 年 6 月号
「発音・聞き取りレッスン 2・「ふ」と hu は違う音」
『基礎ドイツ語』 三修社 1999 年 6 月号
「アルファベート―ドイツ語の ABC」
『基礎ドイツ語』 三修社 1999 年 5 月号
「ドイツ語の発音とつづり」 『基礎ドイツ語』 三修社 1999 年 5 月号
「発音・聞き取りレッスン 1・リズムで発音」
『基礎ドイツ語』 三修社 1999 年 5 月号
「認容文のいろいろ」 『基礎ドイツ語』 三修社 1999 年 4 月号
「接続法の形態」 『基礎ドイツ語』 三修社 1999 年 3 月号
「分離動詞」 『基礎ドイツ語』 三修社 1998 年 9 月号
「kein と nicht の使い分け」 『基礎ドイツ語』 三修社 1998 年 7 月号
「副詞的 4 格」 『基礎ドイツ語』 三修社 1998 年 7 月号
「名詞の複数形」 『基礎ドイツ語』 三修社 1998 年 6 月号
「名詞と定冠詞―性と格の示し方―」『基礎ドイツ語』 三修社 1998 年 5 月号
「要求話法」 『基礎ドイツ語』 三修社 1998 年 3 月号
「比較級・最上級」 『基礎ドイツ語』 三修社 1998 年 12 月号
「不定代名詞と指示代名詞」 『基礎ドイツ語』 三修社 1998 年 11 月号

【学会発表・招待講演（共同発表を含む）】

「「生徒の資質・能力を育成するための授業設計とその評価」―逆向き設計を取り入れたパフォーマンス評価の効果」（共同発表）（2021 年，日本独文学会春季研究発表会）

「多言語・多文化化する日本社会と JACTFL の活動」（2021 年，第 8 回 JaF-DaF フォーラム）

Japan as a Society Becoming Multilingual and Multicultural（2020 年，多言語教育の意義とは？―外国語教育・学習研究に関する国際シンポジウム）

Increase of Foreign Workers and Future Foreign Language Education in Japan（2020 年，Educating the Global Citizen: International Perspectives on

Foreign Language Teaching in the Digital Age）

「パフォーマンス課題における自己評価の効果について―CEFR の共通参照レベル，ルーブリック，自由記述による総合的評価の提案」（共同発表）（2019 年，言語教育エキスポ）

「Mediation のための「やさしい日本語」を考える」（2019 年『ヨーロッパ言語共通参照枠』（CEFR）増補版と複言語・複文化主義―変革を求められる日本の外国語教育をめぐって―）

「CEFR の複言語主義と日本における言語教育の課題」（2018 年，京都産業大学外国語学部 FD 研修会）

「内なるグローバル化と共通教育―言語・文化教育を柱として―」（2018 年，第 68 回東北・北海道地区大学高等・共通教育研究会）

「（再び）CEFR とは何か？」（2018 年，グローバル化に対応した外国語教育推進事業第 2 回会合）

「バーゼルにおける外国語教育のための共通基盤としてのパスパルトゥー」（共同発表）（2018 年，言語教育エキスポ 2018）

CEMS Japanese Education at Keio―Demands for Japanese?（2017 年，CEMS Language Symposium）

「ドイツ語教育の現状と日本独文学会「ドイツ語教員養成・研修講座」」（2017 年，大学英語教育学会 第 56 回国際大会）

Was bewegt japanische Studierende zu einem nicht-englischen Sprachenlernen? ―im Falle Deutsch―（2017 年，2017 年度国際ドイツ語教員連盟研究発表会（IDT 2017））

「スイス・バーゼル市州における外国語教育政策パスパルトゥーと日本での応用可能性」（共同発表）（2017 年，公開シンポジウム「日本の外国語教育を豊かにするには」）

「マルタ共和国の言語教育について」（共同発表）（2017 年，公開シンポジウム「日本の外国語教育を豊かにするには」）

「マルタの小学校における複言語教育―その朝鮮と課題―」（共同発表）（2017 年，日本言語政策学会第 19 回研究大会）

「CEFR とは何か？」（2017 年，外国語教育強化拠点事業第 1 回会合）

「地域語アルザス語の位置づけと，独仏二言語教育―フランス・アルザスにおける複言語主義―」（共同発表）（2017 年，言語教育エキスポ 2017）

「人を育てる外国語教育」（2016 年，東北大学ドイツ語教授法強化講座「学習者中心のドイツ語教育のために」）

「フランス・アルザスにおける複言語・複文化能力養成のためのドイツ語（アル

ザス語）教育」（共同発表）（2016 年，日本独文学会 2016 年度春季研究発表会）

「ヨーロッパの子供たちはどのように外国語を学んでいるか？―ヨーロッパ言語共通参照枠の現状と今後」（2016 年，南山大学地域研究センター共同研究主催第 1 回講演会）

「ヨーロッパにおける複数言語教育の実態調査から学ぶこと」（2016 年，言語教育エキスポ 2016）

「言語種と学部・学校の壁を超えて―慶應義塾における，CEFR をモデルとした議論と行動の共通の場作りについて―」（2016 年，東北大学高度教養教育開発推進事業セミナー「EU の言語教育政策における「複言語主義」―その可能性と直面する問題―」）

Ein Deutschlehreraus- und Fortbildungskurs in Japan. Ein Versuch von Qualitätssicherung des Deutschunterrichts（2015 年，Germanistik zwischen Tradition und Innovation XIII. Kongress der Internationalen Vereinigung für Germanistik）

「包括的言語教育の有効性と課題―イタリア・ボルツァーノ県オルティセイ市を事例に―」（共同発表）（2015 年，言語教育エキスポ 2015）

「イタリア・南チロルにおけるドイツ語教育―ラディン語地域における複言語教育を中心に」（共同発表）（2014 年，日本独文学会 2014 年度秋季研究発表会）

The impact of the CEFR on foreign language education in Japan（2014 年，AILA 2014）

「大学におけるドイツ語学習者の動機と動機づけ―6 言語を対象とした質問紙調査から」（共同発表）（2014 年，日本独文学会 2014 年度春季研究発表会）

「第二外国語科目（既習者クラス）における高校・大学連携に対する意識のアンケート調査について」（共同発表）（2014 年，言語教育エキスポ 2014）

「LingoFox 入門―ワンクリックでワークシートを作ろう―」（2014 年，日本独文学会ドイツ語教育部会第 3 回ワークショップ）

「第二外国語では文法学習はどこまで必要か―「気づき」と「自律」と「協調」を重視した授業実践に向けて―」（2014 年，桜美林大学第二回外国語教育デパートメント教員研修会）

Über den Einfluss und die Anwendung des GERs in Japan（2013 年，2013 年度国際ドイツ語教員連盟研究発表会（IDT 2013））

「生涯学習としてのドイツ語学習―CEFR を参考にした制度設計に向けて―」（2013 年，日本独文学会 2013 年度春季研究発表会）

「「共生の（ための）言語教育」に向けて」（2013 年，日本外国語教育推進機構

外国語教育の未来を拓く～多様な言語 現場の英知をつないで～）

「CEFR の日本における応用可能性と課題」（2012 年，獨協大学外国語教育研究所公開研究会）

「授業コンテンツ・方法と学習環境の照応」（2012 年，大学教育改革フォーラム in 東海 2012）

「ドイツ語教育部会企画：徹底討論：ドイツ語教育部会は誰（のため）のものか？（承前）―ドイツ語教育研究の立場からの提言―」（共同発表）（2011 年，日本独文学会 2011 年度秋季研究発表会）

「融和的日本社会の構築に向けて―少数言語話者との共生と複言語・複文化能力―」（2011 年，日本ロシア文学会 プレシンポジウム）

「複言語・複文化能力育成のための教育システムと教員養成」（2011 年，JACET 50）

「発音指導方法の類型化に向けた試み―母音の特性を利用した自律学習への糸口―」（共同発表）（2010 年，日本独文学会 2010 年度秋季研究発表会）

「ドイツ語教育部会企画：徹底討論：ドイツ語教育部会は誰（のため）のものか？」（共同発表）（2010 年，日本独文学会 2010 年度秋季研究発表会）

「第二外国語では文法学習はどこまで必要か？―「気づき」の養成の観点から―」（2009 年，獨協大学大学院外国語学研究科・外国語学部共催シンポジウム 外国語教育の理論と実践―語彙・文法教育を中心に―）

Förderung eines autonomen und interaktiven Lernens auf der Lernplattform Moodle（2009 年，2009 年度国際ドイツ語教員連盟研究発表会（IDT 2009））

「ドイツ語教員養成・研修講座 2007 年～ 2009 年の紹介と報告」（共同発表）（2009 年，日本独文学会 2009 年度春季研究発表会）

「21 世紀的言語教育の課題―複言語能力の育成について―」（2009 年，特色 GP フォーラム）

「大学における言語教育の目的は何か？―英語教育の継続性を視野に入れつつ―」（2009 年，現代 GP フォーラム「高等教育における英語教育の在り方を考える」）

「日本におけるドイツ語教員養成―現状と課題―」（共同発表）（2008 年，日本独文学会 2008 年度秋季研究発表会）

「日本のドイツ語教育における音声指導の実態と問題点」（2008 年，大阪言語研究会第 162 回例会）

「慶應義塾日本語版 CEFR チェックリストを用いた学習者の英語能力レベルの記述の試み」（共同発表）（2008 年，第 12 回日本言語テスト学会全国研究大会）

Was motiviert japanische Deutschlernende? ―eine empirische Studie（共同発表）（2008 年，2008 年度国際応用言語学会）

「日本における多言語教育の必要性と CEFR」（2008 年，日本独文学会 2008 年度春季研究発表会）

「初年次における他者とは―グラウンデット・セオリー・アプローチによる大学間 CSCL 発展に向けての知見」（共同発表）（2008 年，大学教育学会）

「「振り返り」と「気づき」の場としての LMS―ドイツ語教育の現場から―」（2008 年，第 74 回 CIEC 研究会）

「言語一貫教育と多言語教育の推進―慶應義塾大学外国語教育研究センターの取り組み」（2008 年，国際シンポジウム「大学における外国語教育の二つの挑戦：多言語教育と自律学習」）

「ヨーロッパ共通参照枠の基本理念と日本における受容の問題」（2007 年，神奈川大学横浜キャンパス外国語教育協議会講演会）

「外国語教育研究と高等教育における言語教育への展望」（2007 年，慶應義塾大学外国語教育研究センター AOP シンポジウム「慶應義塾における言語教育のグランドデザイン」共通基盤としての言語教育のフレームワーク構築に向けて）

「複言語・複文化能力養成のための基盤構築―慶應義塾における文部科学省学術フロンティア推進事業「行動中心複言語学習プロジェクト」の現状と課題について―」（共同発表）（2007 年，日本独文学会 2007 年度秋季研究発表会）

「大学間 CSCL（コンピューター支援の協調学習）で学生の学びに何が起こるのか―質的調査による前調査の結果から―」（共同発表）（2007 年，日本独文学会 2007 年度秋季研究発表会）

「初年次外国語教育―大学間 CSCL の教育的効果―」（共同発表）（2007 年，日本教育工学会第 23 回全国大会）

「初年次の外国語教育における大学間協調学習の試み」（共同発表）（2007 年，第 20 回社会言語科学会研究大会）

Why do I learn two or more foreign languages?（2007 年，JALT Pan-SIG Conference 2007）

「LMS を使った授業展開と協調学習について―21 世紀の外国語教育―」（2007 年，英知大学 CALL ワークショップ）

「ハイパー・デジタル・インターフェイス（hydi）コンセプトとシステム・デザイン」（共同発表）（2006 年，私立大学情報教育協会大学教育・情報戦略大会）

Zur Förderung des Kultur- und Lernbewusstseins durch Nutzung einer webbasierten Lernplattform（2006 年，Asiatische Germanistentagung 2006）

「外国語教育における LMS の意義」（2006 年，第 46 回 LET 全国研究大会）

「大学における外国語教育の近未来像」（2006 年，慶應義塾大学外国語教育研究

センター主催シンポジウム「私たちが目指す卒業生像」）

Muttersprachliche Interferenzen und phonetische Schwierigkeiten bei japanischen Anfängern—im Falle Hören—（2006 年，Das 10. Internationale Symposium, Koreanische Gesellschaft für Deutsch als Fremdsprache）

「日本独文学会主催「ドイツ語教員養成・再研修講座」の成立と現状について」（2006 年，第 20 回関西フランス語教育研究会）

「外国語学習における情報コミュニケーション技術の活用と社会的知識構成主義」（2006 年，成城大学メディアネットワークセンター研究会）

「『ヨーロッパ共通参照枠』成立の背景とその概要」（2006 年，慶應義塾大学外国語教育研究センター CEF 研究会（第 1 回））

「LMS の利用と CALL システムを用いた作文指導」（2005 年，慶應義塾大学外国語教育研究センター・シンポジウム）

「ドイツ語教育のプロを育てる！」（2005 年，ドイツ語教育研究会 第 100 回例会記念シンポジウム）

「慶應義塾大学外国語教育研究センターの現状とカリキュラム研究」（2005 年，慶應義塾大学教養研究センター 2005 年度基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」）

「学びをかえりみる契機—学生によるオンライン教材の作成—」（2005 年，第 59 回日本独文学会春季研究発表会）

「自律的学習者の養成—情報コミュニケーション技術を活用して—」（2004 年，学習院大学外国語研究センター第 1 回外国語授業研究ワークショップ）

Die elektronische Lernplattform für die Förderung des Lernbewusstseins（2004 年，Tagung des Taiwanesischen Germanisten- und Deutschlehrerverbandes）

「CALL の歴史とその今日的意義について」（2004 年，慶應義塾大学日吉 ITC「e-learning 公開講座」）

「自律的学習者像を模索して—人生 80 年時代の外国語教育の目指すもの—」（2003 年，日本大学教育制度研究所研究会）

「21 世紀の外国語教育とは？—慶應大学外国語教育研究センターを立ち上げて—」（2003 年，獨協大学外国語教育研究所第 47 回講演会）

Deutschlehrerausbildung in der informations- und kommunikationstechnologischen Gesellschaft（2003 年，Zweites Internationales Kolloquium der Japanischen Gesellschaft für Germanistik）

「外国語科教員養成における CALL」（2003 年，外国語教育学会第 7 回大会）

「語力教育と慶應義塾大学外国語教育研究センターの使命」（2003 年，慶應大学外国語教育研究センター開所シンポジウム）

ICT und Handlungsorientiertes Sprachenlernen（2003 年，文部科学省ゲーテインスティトゥート共催夏期ドイツ語教員研修会）

「ヨーロッパにおける CALL 研究の現状」(2003 年，ドイツ語応用言語学研究会）

Deutschlernen in Japan—Zur Geschichte und den heutigen Problemen—（2003 年，Linguistisches Colloquium, Universität Essen）

「CALL 教材による聴き取り練習」（2002 年，ドイツ語応用言語学研究会）

「コンピューター活用による自律学習の促進—ドイツ語教育における具体例」（2001 年，関西大学外国語教育研究機構 FD セミナー）

「外国語教育における CALL の研究と実践」（2001 年，MMNet2001「IT と学習環境」シンポジウム）

「日吉キャンパスにおける外国語教育の今後について（その 2)」（2000 年，外国語教育フォーラム）

Warum setzen wir CALL ein? —Neue Konzeption des CALL-Zimmers—（2000 年，文部科学省ゲーテインスティトゥート共催夏期ドイツ語教員研修会）

Das neue CALL-Zimmer an der Keio (Hiyoshi) und der Einsatz von computergestützten Übungen im Unterricht（2000 年，Arbeitskreis für DaF 早稲田大学語学研究所）

「日吉キャンパスにおける外国語教育の今後について（その 1)」（2000 年，外国語教育フォーラム）

「ドイツ語 CALL の DaF における位置付け—問題点と展望—」（1999 年，日本独文学会秋季研究発表会）

「CALL 教室の新しい形態—慶應大学日吉キャンパス 334 番教室を例にとって—」（1999 年，ドイツ語情報処理研究会研究発表会）

DaF im Internet—Warum Internet im Unterricht?—（1998 年，文部科学省ゲーテインスティトゥート共催夏期ドイツ語教員研修会）

Was kann der Computer im Deutschunterricht tun?（1997 年，Arbeitskreis für DaF 早稲田大学語学研究所）

【共同研究（外部資金)】

「パフォーマンス評価に基づく外国語オンライン教育の高大連携および国際協働による研究」（科学研究費助成事業基盤研究（C）2021 ～ 2024：分担）

「一貫教育における複言語能力養成のための人材育成・教材開発の研究」（科学研究費助成事業基盤研究（A）2015 ～ 2019：代表）

「外国語一貫教育における複言語・複文化能力育成に関する研究」（科学研究費助成事業基盤研究（A）2012 ～ 2015：代表）

「新しい言語教育観に基づいた複数の外国語教育で使用できる共通言語教育枠の総合研究」（科学研究費助成事業基盤研究（A）2011 ～ 2015：分担）

「行動中心複言語学習プロジェクト」（「私立大学学術研究高度化推進事業」「学術フロンティア推進事業」2006 ～ 2010：2006 年度は金田一真澄，2007 年度以降は境一三が代表）